九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

チョウサアと現代英語

中山, 竹二郎

https://doi.org/10.15017/2557069

出版情報：文學研究. 13, pp.33-50, 1935-10-20. 九州文學會
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

チョウサアと現代英語

中山竹二郎

まへがき

チョウサアは十四世紀の詩人であり、從つてその言語は所謂「中世英語」に屬する。もつと詳しく云ふならば彼の文學活動の最も華かであつたのは千三百八十年代であり、彼の死を一四〇〇年とすると、彼の作品は皆中世英語で書かれたものと考へて誤りはない。この中世英語と近代英語との限界に就ては學者の間に諸説ありて一世紀或は百五十年の差を生ずることさへあるが、何れにしても一四〇〇年以前にまで近代英語の領域を擴げることはない。であるからチョウサアの言語は正に中世英語に屬するといはなければならない。しかしわが詩人の言語が中世英語の本格的の形態を具へてゐるか、或は既に近代英語に推移してゆく過渡期的の狀態に在つたかは問題となり得る。Wyldは音聲上の考察からして、チョウサアは近代英語の初まりを聞いたであらうと推論してゐるが、[1] 音聲上だけでなく語形、文章の方面でも、チョウサアと近代英語との近似は寧ろ顯著なものがあるのではなからうか。私どもがチョウサアを讀んでの感じから云ふと、彼の言葉は私どもの學ぶ標準近代英語に近く、時には近代英語そのものゝ古體ではないかとさへ思はれる。成程時には近代英語にない奇異な表現にも遭遇するが、見たところエリザベス朝の文章かと想はれる部

分も多い。チョウサアの英語が私どもに理解し易い例證として彼の「善女傳說」の開卷最初の三行を引用しよう—

A thousande tymes I have herd men telle,
That there is joy in hevene, and peyne in helle,
And I acorde wel that it is so. (Text B)

この一節は假令わが詩人の作品に接したことのない、或は特に中世英語の知識のない人にとつても容易にその意味を推知し得べきほど近代英語的である。そしてかゝる程度の近似は彼の作品中に決して稀ではない。Gosse は近代英文學の研究はその言語の理解の容易さからみてチョウサアの時代から始めるのを實際的に便宜であると說いてゐるが、(2) 殊に私ども英語を外國語として學ぶ者にとりてはかうした言語上の考慮は重要である。文學鑑賞の目的でチョウサアを讀まうとする人は中世英語一般の言語學的知識を得る前に、まづ詩人の作品に親しむことが可能でもあり劃切でもあると信ずる。チョウサア學者の中には、古代英語の豫備知識なしにこの詩人を讀むことの非を說く人もあるが、總じて日本の讀者は上代は扨置き中世英語の諸方言に對する親しみが薄いやうに思はれるから——無論これは概括的に云ふので、例外のあるのを認めるが——近代英語の知識を以て直にチョウサアにあたつてゆくといふ實際的の方法を薦めたい。所詮私どもは近代英語の光に於てチョウサアを讀む外はないのではないか。

しかし近代英語の光で讀むことは近代英語に直して讀むことを意味しない。玆に從來屢々試みられたチョウサアの近代譯に就て一言するのも從爾ではあるまい。古くは Dryden がチョウサアの近代英語化を試み、十九世紀の初めには Wordsworth の譯があり、更に降つては Skeat の譯、Mackaye and Tatlock の散文譯、最近には J. U. Nicolson の

「キャンタベリ物語」の全譯さへ出てゐる。しかしこれらの企ては原文に對する忠實さの差はあるが要するに飜譯である。物語の說明として、或は原文の解釋としては役立つであらうがその內容は異つたものとなる。良心的な Skeat はその「騎士物語」現代語譯の序文に飜譯の困難を述べ、原文の *riche* を *wealthy* に變へ、或行には *there* を附加したことなどを說明してゐる。[3] チョウサア現代譯の困難の原因は主に語尾の *-e* にあると私は考へる。「キャンタベリ物語」の「序話」第一行の *Aprille* は語尾の *-e* を響かせて三綴の語となつてゐるがこれを現代英語 *April* に變へたのでは綴の不足を來し韻律の亂れを生ずる。さらばとて原典の *Aprille* に對しては *April* 以外にこれに相當する語はない。だから Nicolson の譯にはこの行に "with fruit" といふ全く原文にない二語を附加して綴の不足を補つてゐる仕末である。かゝる塡充語や代用語が原文の持つ味を落とすのは當然である。チョウサアに於ては何が語られるかよりも如何に語られるかが重要であるゆえに、原典をあるがまゝに讀む外に眞の鑑賞の術はない。況んや語彙文法に於てチョウサア英語と現代のそれとの間に類似が多く、意味を汲み取るだけならば Skeat の簡潔な Glossary で事足りる有樣であるのだから。

チョウサアの用ひた語の多くは近代英語に繼承され、今日まで生きてゐる。私はこの事實を明かにするために次のやうな計數的のテストを試みた。即ち Tatlock and Kennedy 編する所の *Chaucer Concordance* (1927) 中の A から M まで (I, J, K を除いて) 十アルファベッツの各々初めの百語をとり、その百語の中、現代英語で廢用に歸した語を算へた。(但し固有名詞、變化形、純然たる外國語等は計算に入れない。) その結果は——

A, 19; B, 14; C, 16; D, 16; E, 20; F, 11; G, 28; H, 24; I, 12; M, 18.

即ち一〇〇〇語中僅に一七八語、概略一八パーセントの廢語を含むことを知り得た。これはチョウサア英語が現代英語に近似してゐる事實に對する一の說明となり得ると考へる。

一、チョウサアの語彙

チョウサアを「濁りなき英語の泉」と Spenser が稱へてからこのかた此句は英文學徒の間に常套句となつた。しかし此 "well of English undefyld" が眞に何を意味してゐるかは必ずしも明でない。チョウサア時代の英語は既にアングロ・サクソン語の純粹さを失つて mixed language と化してゐた。中世英語幾世紀かの間を通じてフランス語は絕えず英語の中に流入した。殊に十四世紀の後半に此傾向が著しく、Jespersen の試みた統計に據つても、一三五〇—一四〇〇年即ちチョウサアの時代は他の何れの半世紀にもまさつてフランス語の流入、フランス語の英語化を見たのであつた。[4] 言葉の藝術家として敏感な官能を持つたわが詩人がどうして此風潮に無關心であり得ようか。殊にチョウサアは大陸文學の影響を深く受けた。そのためであるか、或はチョウサア自身の中にフランス的の素質が在つたためか或はその兩者のためか、何れにせよチョウサアには嶋國の霧に包まれた暗さが無い。五月の朝に微笑む明朗さ、肉慾の醜さをも惡びれずに正視得るナイーヴテが彼をイギリス的の作家より區別する。一般の文學史家がチョウサアの文學的活動をフランス期、イタリア期、イギリス期と區分するのに對し、チョウサアは常にフランス的であると道破した Legouis の說[5]に私は左袒するものである。

概括的に云つて、チョウサアは正しくフランス的である。しからばこのフランス的傾向乃至素質がわが詩人の英語

に如何に作用したか。果して彼の英語が「濁りなき」清淳さを保ち得たのであらうか。この問題は多面的な觀察を要求する。その中發音に關する部分の多くは私などの容易に手を出せない方面であり、また專門學者の意見と雖も臆測以上に出でない點が多いのであらう。しかし語彙に關する方面は計數的な調査が可能であり、比較的正確を期し得る領域であるから茲にはまづ、チョウサアがその用語に於てフランス乃至大陸の影響をどの程度に受けてゐるかを考察してみよう。

このことに就ては既に Ellis がその名著「古英語發音考」に於て若干の研究を發表してゐる。彼は「キャンタベリ物語」の「序話（プロローグ）」中に在るフランス系の語の數を計算し「序話」の總行數八五八行に對しフランス系の語數僅に七六一語に過ぎない、即ち一行一語以下の割に過ぎないことを發見した。そして彼は此事實をさして「この作品が壓倒的にイギリス風である證據これに過ぐるものなし」と云つてゐる。[6] 私はエリスの此の研究と同方面の事項を稍異つた方法で調査した。即ちチョウサアの作品中の數ケ所から地名人名などを除いて數百語づゝを選びその中に用ひられてあるフランス或はラテン起源の英語とアングロ・サクソン系の英語の數を計算し、前者の後者に對する比

作品	作品中の部分	全語數	フランス・ラテン系語數	百分比
Romaunt of the Rose, A	"Narcisus" ll. 1469-1548	499	55	11
Lenvoy a Scogan	ll. 1-52	378	48	13
The Hous of Fame	ll. 1-85	500	55	11
C. T., The Prologue	A. ll. 794-858	500	52	10
C. T., The Clerk's Tale	E. ll. 57-121	500	65	13
		2377	275	11

率を求めた。その結果は右表の通り平均一一％といふ誠に低い率を示してゐる。この調査はその取材の範圍が狹いので絶對の信頼は置き得ないけれども、チョウサアの語彙が外國語の過度の侵入から守られてゐる大體の傾向を知ることができる。猶上記の比率が如何に低いかは同じ方法で得られた他の詩人の語彙の統計と對照すれば一層明瞭となるであらう。いま甚だ概略ではあるが Keats と Browning に於ける場合をみるに左表の通りである。即ちチョウサアの一一％に對し近代二詩人の比は一四乃至一五％を示してゐる。

詩人	作品	作品中の部分	ラテン・フランス系語數	百分比
Keats	*Endymion*	第一卷初の500語	71	14
Browning	*The Ring and the Book*	第一卷終りの500語	77	15

前掲チョウサア語彙の統計表に就て興味を感じたことは「序話」のやうに全くの創作の場合と、「學生の物語」の如く外國文學の飜譯の場合とで外來語の比率が甚だしく變じないことである。わが詩人は Petrarch の原典を前に置いて筆を執りながら母國語と原作者の言葉との間にはつきりとけぢめを附けて、英語の益なきラテン化を戒慎したかの如く思はれる。

チョウサアはしかし徒に外國語を却けたのではなく、時には外國語を重言的に用ひてゐる——

I have a *leyser* and a *space* (F. 493)

that *cause* and that *conclusioun* (F. 492)

の如き同意語の反復や、また

for your *hele*, and for your *prow* (B. 4140)

she *frayneth* and she *preyeth* (B. 1790)

の如くアングロ・サクソン系の語と外國系の同義語とで對句を構成する場合などには特にチョウサアの外國語好みが著しく感ぜられる。しかし大體としてみるに彼の作品中に含まれた外國系の語彙は概して純イギリス語に比し遙にその數少く、この點からチョウサアの英語はその純粹さを高度に保つてゐると云へよう。

二、チョウサアの文法に就ての諸家の說

わが詩人の文法に關する諸家の說にて往々私どもの首肯できないことがある。例へば Skeat の如き大家でもその叙述に不確かな乃至不適切な點がある。例へば *hadde* が「所有した」といふ强意のときには通常二綴であると彼は云つてゐる。(7) 今「キャンタベリ物語」の「序話」だけの中で此語が用ひられてゐる十七箇所に就て調べて見るに

二　綴（ト×）の場合……七例
單　綴（ト）〃〃〃……九例
〃　（×）〃〃〃……一例

といふ結果を得た。この考察は小範圍に局限されてゐるから絕對性を持つわけではないが、大體の傾向を窺ふことはできる。(猶 *hadde* が助動詞として二綴を有つ例は A. 760, B. 3244, 4555, D. 693 等隨所にある)。

また Wyld はチョウサアに於ける副詞が *-e* で終る例として

Wel coude he sitte on hors and *faire* ryde (A. 94)

を擧げてゐる。[8] しかし此例から三十行後（A. 124）には

And Frenssh she spak ful *faire* and fetisly

とあり、*faire* は韻律的に考察して正しく單綴である。かく語尾の *e* が書かれても發音されない *faire* の例はチョウサア中に多い。それらは皆單綴の語尾の無い副詞と認めなければならぬ。何となれば Wyld 自ら云つてゐるやうに、[9] 中世英語の實際の音と綴字とは嚴密に區別しなければならぬから。また *faire* の外に *bright*, *cleer* が語尾なくして副詞的に用ひられる場合が多く、殊に HF. 1.503 の *bright*, HF. 3.332 の *cleer* の如きは綴字にも *-e* が逸失してゐる。

最後にいま一つの例を擧げよう。チョウサアに於ける *from* と *fro* の區別に就て ten Brink は「規則的に」（"regularly"）

母音又は *h* にて始まる語の前では……　*from*

子音の前では……　*fro*

が用ひられると述べてゐるが、[10] 事實わが詩人は決してかゝる法則の束縛を受けない。Tatlock and Kennedy 編輯の *Concordance* 中に選ばれた例を取つてみるに、全く ten Brink の說に反して

h の前に用ひられた *fro*　六例

母音の前に用ひられた *fro*　三例

子音の前に用ひられた *from*　十五例

を發見する。

また Liddell は形容詞の weak form（即ち語尾 *e* に終る形）は固有名詞の前に用ひられると云つて、*Seynte Loy* などの例を擧げてゐる。[11] 今 *Chaucer Concordance* に據れば *Seint(e)* + Proper Name の例は總計二百十五あるが、その中 Liddell の說くやうに weak form の *Seinte* が用ひられたのは僅に二十四例に過ぎない、即ち全體の一一%に過ぎない。他は皆 *-e* のない strong form を用ひてゐる。寧ろ Liddell の說を逆にして strong form が固有名詞の前に來ると云つた方が事實に近い。猶前に述べた弱變化形の二十四例中、十七までは *Seinte Marie* の如く女性名に冠せられてゐるのは注意すべきである。

かくの如き尊敬すべき諸大家——殊に Skeat のやうなチョウサア學者の努力に對しては私どもは深い恩義を感ずる、私どもがチョウサアを今日のやうに鑑賞し得るのは彼に負ふ所が多いと信ずる——の說を檢討して、そこに記述の誤謬或は不十分さを發見することは私ども後學の戒めとなる。チョウサアの言語は中世英語から現代英語への過渡期にあつて型の崩れが多く、不規則性に富む故に、また韻律の要求が語形を左右することが屢々あるが故に、テクストに就て廣くその用例を求め歸納的に考察するに非ざれば正確なる結果に達し難いことを悟るのである。

三、語形の不安定

チョウサアの文法の特異性の一はその語形の不規則にある。即ち同じ意義同じ機能に於ける言葉の形態が一定しないことである。詩人の立場から見ればこれは韻律の調整上大きな自由を享樂することを意味する。現代の標準英語に

あつては、綴發音は勿論、語尾變化の型もそれ〳〵の語によつて固定され、詩人に許されるライセンスの範圍が狹い。無論中には *illustrate* の强勢位置の不定（ㄴ××，×ㅏ×）、*dreamt, dreamed* の兩形併用、*Miss Smith* の複數形不定（*the Misses Smith, the Miss Smiths*）など若干の搖らぎはあるが大體の形は規定されて、*drunk, drunken* の如きダブレツト（doublets）の間にも用法の差異が制約されてある。近代英語も十六世紀に遡ると「規則性」が減じ、言葉の形や働きが自由になる。Shakespeare の英語が如何に奔放であり「不規則」であるかは人の良く知る所である。更に遡つてて十五世紀末の英語の不統一さは Caxton の歎息に表象されたかの觀がある。彼は「卵」を *egges* と呼ぶべきか、將また *eyren* と云ふべきかに惑ひ、當時の英語に據るべき定型のないことを慨歎してゐる。[12] 十五、十六兩世紀の英語は過渡推移の狀態にあつたがゆえに文法や語形に統一性を缺いだといふ解釋がこの場合に可能であると思ふ。

推移とは舊來の標準が崩れ、これに代るべき新しい型が確立しない渾沌の狀態を謂ふ。十五、十六兩世紀を推移の時代と正しく呼び得るなら、十四世紀の、チヨウサアの英語も同樣の、或はそれ以上の意味で過渡時代の特性を具へてゐると云つて差支ない。私にはチヨウサアの英語は中世英語の完成された形態と認められない。寧ろ中世英語がその特質の一部を捨てて近代英語の方向に進み寄つた時代、過渡期の動搖の多く現はれた時代だと考へられる。そこに概括的な文法論が屢々失敗する一因があるのではあるまいか。

以下例を擧げてチヨウサアの文法に於ける不安定或は不規則性に就て二三の考察を試みよう。

イ、强勢位置の不安定

現代英語にあつては *-age, -ance, -dom, -ess, -ing* 等の suffixes には主强勢を置かないのが原則である、中には

princess (×⊥) のやうな稀な例外はあるとしても。しかるにチョウサアに於ては *corage* "courage" が ×⊥(A.22) となることが多く、また時には ⊥× (LGW. 397) ともなる。かく語尾に強勢を置くのはフランス語に倣つたためであると解釋され得る。同様に *horrible* (B. 751) もフランス語風に強勢される。[13] また

agreeable ⊥×⊥ (B. 767), ×⊥ × (Ven. 68)

possible ×⊥× (E. 956), ⊥×× (B. 1222)

も強勢位置が固定しない。以上は外國語系の suffixes であり、殊に *agreeable* の如きはチョウサア時代に初めて英語に入つた語であるゆえに英語化の過程の半ばにあつたと解し、そのアクセント不定もあながち怪しむに足りない。[14] しかるに古來の、純粋のゲルマン系の言葉が同様の不安定を示すのは注目に値する。例へば

-dom *fredom* ×⊥ (A. 46), ⊥× (B. 3832)

-hood *knyghthod* (*e*) ×⊥ (B 3844), ⊥× (A. 2103)

-er *millere* ×⊥× (A. 542) ⊥× (A. 545)

-ing: likyng ×⊥ (B. 3499), ⊥× (C. 455)

の如く當然ゲルマン語風の強勢法が期待される場合にもフランス型が併用されてゐる。同じことは

lemman ⊥× (A. 3700), ×⊥ (A 3705)

に就ても云はれる。

同一の物語中の同じ人物を指す固有名詞のアクセントも一定しない。「辯護士物語」の女主人公コンスタンス姫

Custance は B. 245 では ×⊥, B. 1107 では⊥×⊥となる。

ロ、語尾 *-e* の不安定

中世英語の特質の現はれである此の語尾 *-e* はチョウサア讀者にとつては正に躓きの石である。例へば連續してゐる次の二行を取つてみるに——

Rede which that he was in Machabee

And *rede* the proude wordes that he seyde (B. 3769-70)

第一行の *rede* はその語尾が有聲なるため二綴となり、次行の同じ語はその文法的機能や意義が全く同じであるにも拘らず單綴である。この場合語尾 *-e* を保つか否かは單に韻律上の考慮のみによつて決定されて、全く文法上の制約を超越してゐると見なければならぬ。

副詞の語尾 *-e* の不安定を示す好例として次の二行を引用しやう。

Men may so *longe* graven in a stoon (F. 830)

So *longe* han they conforted her … (F. 832)

同じ副詞 *longe* が第一例では二綴、次例では單綴として取扱はれてゐるのは韻律の上から説明する外はないのではないか。終りに名詞の場合の一例を擧げれば

Aprille ×⊥× (A. 1), *Aprill*⊥× (B. 6)

ハ、語形の不同

同一の語が異つた綴、發音を有つ例も多い。動詞 "to die" の不定法は

dye 〔felonye と押韻〕(B. 644)

deye 〔seye と押韻〕(B. 525)

の二形が行はれる。また形容詞 "high" には *heigh(e)*, *hy(e)* の形があり、"merry" には *merye*, *murye*, *myrie* 等の諸體が見られる。數詞 "one" には *(o)on* とその縮形 *o(o)* が併用されるが、前者は自由な用法を有つに反し、後者は常に子音の前に用ひられる。斯る場合にこそ二形併存の理由が明かである。

現代英語に於ては "be" の三人稱複數叙實法現在は "are" であり、稍々古くは "be" も用ひられた。チョウサアにありては此二形の變體を少くとも五を算へる。即ち

1. a. wommen *are* born to thraldom (B. 286)

b. thise *arn* the wordes (E. 342)

2. a. to Rome *be* they come (LGW. 1712)

b. they *been* thus y-mette (B. 1115)

c. hunters *belh* nat hooly men (A. 178)

何故かく多樣な形がわが詩人によつて用ひられたかは說明に苦しむ。たゞ前揭 2. a. の場合、*Rome* 〔發音 ro:mə〕の次にあるゆえ母音の衝突を避けて *be* を用ひたのであらうとは云ひ得る。

二、複數及び屬格の語形

チョウサアでは "year" は「無變化複數」として、即ち

twenty yeer (A. 601), ten yer (TC. 1.60)

の如く用ひられるが、他方 s 形の複數も發見される。即ち

many yeres (A. 1521), in yeres two (D. 916).

また "ash" の普通の複數形 *ashen* の外に *ashes* (G. 807) があり、"foe" には *foes* と *foon* の兩複數形が併び用ひられる。

屬格に就ても同樣の現象を見る。"father" の屬格は主格と同形であり、

by my fader soule (A. 781, etc.)

はチョウサアの讀者に親しみ深い表現である。しかし他方に *fadres* (B. 861) なる形も發見される。"lady" の場合にも

his *lady* grace (A. 88) と my *lady's* depe sikes sore (TC. 5. 675) と兩形が用ひられる。

ホ、"of" の省略

現代英語の "all manner of things" に相當するチョウサア英語は

alle maner thynges (A. 2181)

であり、その他 *no maner wight* (A. 71), *swich manere* doctrine (B. 1689) 等の表現に於ては何れも "manner" はその次に "of" が省略されたため「無變化の屬格」のやうに用ひつれる。しかし此用法は絕對の法則ではなく、

× ⊥ × ⊥× ⊥ ×⊥×
And queynte maner of figures (HF. 1. 126)

の如く "of" を用ひた韻文の例があり、"of" が韻律調整の任務を十分に果してゐる。此前置詞の使用省略は韻律がこれを決定するので、散文では寧ろ "of" を用ひる傾向が強いやうに思はれる。散文で書かれた「牧師の物語」の中から "manner of" 型の十九例が T. K. の *Concordance* に載せられてゐる。

〈、impersonal construction

茲でいふ impersonal construction とは "it likes me" の如き構造を意味する。この "it" は必ずしも表はされることを要しない、現代英語の "methinks" は正にその型の遺物である。概して現代英語ではこの構造の文章は少くなり、"it likes me" は "I like" と變じ、即ち與格で表はされたものが主格に變つた。さてチョウサアに於ては imp. const. 甚だ多く、彼の英語の一特徴に算へ得る。豫想され得るやうに "it" を伴ふ形(a)と省略する形(b)との混用が著しい。

a. And so *bifel it* on a Saterday (A. 3399)

It happed on a day (A. 1189)

b. *Bifil* that in that seson on a day (A. 19)

If that thee happe to comen (D. 1401)

次はこれに關聯する格の問題に移らう。概してチョウサアには與格の代名詞が多いが、時には主格を用ひる。その例として "loath" の伴つた impersonal construction を取つて見るに、*me were looth* が通常の型であるが、

I so *loth* was that thy-self it wiste (TC. 3. 369)

のやうに *me* が *I* に變じ、從つて "personal" な構造となつた。同様に *levere* (＝"rather") の場合でも *him were levere* なる普通型に對し

I have wel *levere* ever to suffre wo (F. 1531)

といふ表現もある。

形容詞 "woe" が同じく impersonal construction 中に用ひられる例はチョウサアに甚だ多い。そして

so wo is me (B. 817), me is wo (BD. 572), wo is hym (B. 1200), so wo was hem (TC. 3. 1698)

の諸例に於ける人稱代名詞は明かに與格であるが、代名詞でなく名詞の伴ふ場合には格の關係が明瞭を欠ぐ、例へば

Lord, this sely Troilus was wo (TC. 5. 529)

に於て *Troilus* が果して與格なりや或は主格なりやは決定できない。明に主格を認め得るのは次例の如く代名詞の場合である。

In this debat I was so wo (BD. 1191).

ト、不　定　法

現代英語に於て causative "make" は "to" を前置しない不定法を伴ふ。チョウサアにありては三の異つた形が用ひられる、即ち

a. without *to*:　make a man been hool (HF. 3. 180)

b. with *to*: make yow to see (E. 2372)

c. with *for to*: make hem for to grone (TC. 1915)

猶同じことは "ought" の場合にも云ひ得る、現代英語はこの助動詞の後に *to* + infinitive を要求するに對し、チョウサアは作詩上の便宜から三の形の中何れかを選ぶ自由を有つた——

a. without *to*: wel oghte a wyf rather hirselven slee (F. 1397)

b. with *to*: wel oghte ye to pleyne (Mars. 286)

c. with for *to*: wel oghte a preest ensample for to yive (A. 505)

次に現代英語に於ては "see", "hear" などの感覺動詞の後に「人」が來るか「物」が來るかに應じて不定法或は過去分詞を伴ふのが規定である、即ち "hear him *sing*" 或は "hear a song *sung*" が定型である。チョウサアの用法は例の如く一定でない。

現代英語の慣用に適ふ用例——

a. I have herd men telle (LGW. 1)

b. I have herd it told (G. 936)

然らざる用例——

a. ye han herd me sayd (F. 1547)

b. a sooth I have herd seye (B. 3154)

(1) H. C. Wyld: *A Short History of English*, § 152.
(2) E. Gosse: *A Short History of Modern English Literature*, p. 1.
(3) *The Knight's Tale* in "The King's Classics" Pref. xxi.
(4) O. Jespersen: *Growth and Structure of the English Language*, § 95.
(5) E. Legouis: *A History of English Literature*, Vol. 1, p. 86.
(6) A. J. Ellis: *On Early English Pronunciation*, Pt. 3, p. 651.
(7) W. W. Skeat: *The Complete Works of G. C.*, BK. V, p. 31 etc.
(8) H. C. Wyld: *A Short History of English*, § 332.
(9) H. C. Wyld: *A Short History of English*, § 152.
(10) B. ten Brink: *The Language and Metre of Chaucer* (Eng. trans.) § 270.
(11) M. H. Liddell: *Chaucer*, § 115 (d).

引用語句の出所を示す略語解

A, B, C, D, … G は the *Canterbury Tales* 中の Group の名
BD = *The Book of the Duchesse.*
Mars = *Compleynt of Mars.*
TC = *Troilus and Criseyde.*
HF = *The Hous of Fame.*
LGW = *The Legend of Good Women.*
Ven = *The Compleynt of Venus.*

（未完）